

+ 30 【うたまる】

春には春の、夏には夏の、秋には秋の、冬には冬の歌が、どこからかきこえます。

春じゃ春じゃ
ありがたやの
春じゃ春じゃ
飲めや歌えや

夏じゃ夏じゃ
ありがたやの
夏じゃ夏じゃ
飲めや歌えや

秋じゃ秋じゃ
ありがたやの
秋じゃ秋じゃ
飲めや歌えや

冬じゃ冬じゃ
ありがたやの
冬じゃ冬じゃ
飲めや歌えや

こうして書き出してみると、春夏秋冬同じ内容だが、歌う調子はまったくちがいます。

春は軽やかに、夏は健やかに、秋は爽やかに、冬は冷ややかな調子で歌われます。

小学校の同級生にきいてみると、そんな歌はきこえんとみんないいます。

ぼくにだけきこえるということは、耳鳴りとか幻聴（げんちょう）と

いうものかしらと、ここはやっぱり懐爺にきいてみなくては。

そうして行った日は、馬肥ゆる秋で、馬はともかくとしても、草むらでは蟋蟀やら鈴虫やらが鳴いていました。

「あのこおろぎや、あのすずむしよりも、うたがうまいんじゃ」

「そうですか。歌うおばけ、【うたまる】ですね」

懐爺はいともあっさりといつてのけました。

「そんなかんたんに、きめつけていいのかのう」

「金ちゃんとはしょっちゅう会っていますから、金ちゃんが耳鳴りや幻聴がするとはおもわれません。それでもほかのこどもたちにきこえないなら、まずもって【うたまる】しかありませんからねえ」

「あのえかきの、【うたまる】かい」

「歌磨呂ではありません。おばけには【うたまる】のほかに〈まる〉が付くものがけっこうあります。いわば大派閥（だいはばつ）といったところですよ。

【はなまる】

【ばかまる】

【へそまる】

【くそまる】

【あほまる】

【ぼけまる】

【まるまる】などなどです」

懐爺は一つ一つおもいだしながら名をあげて、楽しそうでした。

「ほかの〈まる〉はしらんが、【うたまる】はいいのう。みそらひばりより、うたがうまいのう」

「美空ひばりにはかないませんがね。というのは【うたまる】は、別名【さけまる】ですが、酒毒（しゅどく）にやられていましてねえ。酒を呑まないと歌えないんですよ」

大酒呑みか。

中毒か。

ぼくの父親は大酒呑みで、そのせいで早死にしたときいていましたから、大酒呑みに対しては近親憎悪（きんしんぞうお）がありました。

「するてえと、なんじゃれかんじゃれ、こまるのう」

「はい。酒代（さかだい）がかかります。おばけの世界にも酒はあるんですが、鬼の姿をした盗賊の酒呑童子（しゅてんどうじ）が、本物のおばけではないくせに、おばけの世界の酒をみんな吞んでしまうのですから、【うたまろ】は苦心惨憺（くしんさんたん）しています」

「それじゃ、さるとなかよくすればいいのう。さるざけがのめるからのう」

「はい。じっさい【うたまろ】は猿酒を吞んでいます。でも猿酒は度数が高いですから、【うたまろ】が【おしまろ】になってしまうのではと心配です」

「それはこまるのう。あのすばらしいうたがきこえなくなるからのう」

「そうですよね。金ちゃんが歌上手なのは、きっと【うたまろ】のおかげですものね」

「それはそうじゃ。【うたまろ】がいつまでもげんきなら、わしは、ひばりになれる」

実はそのころぼくは、野球選手か音楽家になりたかったのです。

でも貧乏で野球道具は買ってもらえないから、野球選手は無理です。

楽器も買ってもらえないから、演奏家は無理でしょうが、歌うのに道具はいらないから貧乏でも大丈夫です。

歌手がいい。

「酒毒が厄介（やっかい）なのは、酒を吞まないときは、痙攣（けいれん）や麻痺（まひ）があるのに、酒が入るとそれがぴたりと止まるところなんです」

「なるほど。けいれんやまひをとめるために、またさけをのむってことかい」

「ええ。【たくさん】という酒毒者のおばけは、酒はもうたくさんといいつつ、たくさん酒を吞んで、野たれ死にしましたからねえ」

「【うたまろ】だけは、へたれじゃねえ、のたれじにしてほしくはないのう」

けれどもぼくの願いむなしく、【うたまろ】の歌はそのうちきこえなくなりました。

まちがいなく、ぼくが歌手になれなかったのは【うたまろ】が【おし

まる】になったせいです。